課題発見の場となるために

迫田　正美
環境建築デザイン科

学生たちにとって大学生活の 4 年間は多かれ少なかれ以降の人生の方向性を決める大切な時間であろう。環境建築デザイン学科の学生にとって、また特に建築設計などのデザインに関わる仕事に関わろうとする者にとっては自身の問題意識、あるはデザインに対する根本的な心構えを獲得し、大げさに言えば人生における設計テーマの萌芽を胚胎することが望まれるのである。

このような課題やテーマの発見にはフィールドへ出て現場での経験や出会いの体験の中から発見される事柄が大きな意味を持つのは言うまでもなく、本学科でいえば設計演習などの課題への取り組みや地域活動への参加の中から発見していくものでもあろうが、いわゆる座学の中からもそのような発見や出会いが生まれてくることもある。個人的な経験ではあるが、私は学生時代工学部に所属しており、専門科目の習得の中からも多くの刺激を受けたが、卒業単位とは無関係に受講した東洋思想史や文化人類学、美術史学などの講義とそこで出会った教員の個性ある授業や、先輩のつてを辿って他大学の研究室のゼミに参加させてもらったこと、これも別の大学の研究室の国際コンペの手伝いをさせてもらったりしたことなどが、振り返ってみるとより印象的で大きな刺激となっていたことに気づかされる。その意味で人間学や副専攻科目はもとより、他学部、他学科の科目などにも積極的に取り組んでもらうことを学生たちには勧めている。

私の担当する西洋建築思潮史、環境造形論、環境行動論などはいわゆる座学であり、特に西洋建築思潮史は基本的に歴史学、思想史であり、環境造形論もカリキュラム変更の都合から近代建築史を同時に講義する形になっているので、どうしてもクロニカルな歴史的事象を含まざるを得ない。西洋建築史の起源を紀元前 5 世紀の古代ギリシアにおくとしても、20 世紀のモダニズムとその後現代にいたる約 2500 年にわたる歴史的事象を、地域と作品などに即してそれらの特徴と変遷を詳細に講述しようとすると、如何せんクロニカルな事象の解説に陥りがちである。私見であるが、歴史を学ぶ意義はクロニカル（クロノス）なストーリー（history）の知識を得ることにとどまらず、各時代、地域のその時（カイロス）を得た歴史的事象の成立（événement）の背景と意味を把握することにも求められなければならないと考えている。

そこで、西洋建築思潮史と環境造形論における歴史的事実と変遷については、できるだけ図面や写真資料を多く掲載し、読み物としても読みやすいと思われる教科書を採用して、教科書については各学生で通読してもらうこととして、講義ではもっぱら配布資料とスライドなどのビジュアル資料を用いて授業を行っている。各時代、地域での作品成立にはそれぞれの作品毎に、その時宜と背景、目標と憧憬が秘められているのであり、それらの実態をできるだけ体感的に理解してもらえるように工夫している。

西洋建築思潮史では、現代にいたる建築（architecture）のはじまり（archē）を、この概念（範型、idea）を形成した古代ギリシアの思想・文化に求め、その理想として求められた建築像を、特にヘレニズムの思想と芸術を中心にピュタゴラス学派の宇宙論と幾何学、アリストテレスの制作論などを手掛かりにして講述し、併せてパルテノン神殿の成立と構成に関するビデオ映像を示すことでその実相の理解を図っている。

19 世紀までの西洋建築史はこのヘレニズムと、いわゆるヘブライズム（キリスト教）との融合の歴史の一面を持つ。従ってキリスト教神学と宗派の歴史的展開及びその影響を知ることが求められるが、これらについてはアウグスティヌスの二世界論や修道会の思想、トマス・アクィナスらの神学大全（Summa）の成立契機、プロテスタンティズムと宗教改革および対抗宗教改革の展開など、私の知見の限界もあり、ごく概略的な解説に止まらざるを得ないが、ロマネスク、ゴシック、ルネサンス、バロックなどの各洋式建築および個別の作品の成立契機の一面として解説している。

この他に講義を通じて重視しているのは、各時代、地域ごとの芸術作品とその変遷を併せて紹介するこ

とである。建築は時代精神を表現する記念碑的性格をもつ一方で、建設に多くの時間と労力を必要とするだけでなく、その作品の全体像を把握するためには図面や部分的な写真などを提示するだけではどうしても限界がある。建築の空間性などの把握には現地に赴いて実際に体験することが不可欠なのである。それに対して彫刻や絵画などの芸術作品は時代を代表するとともに、時に時代に先駆けて登場し、何よりもその時代の価値観と雰囲気を表現してくれる。ヘレニズム期のギリシア彫刻、帝政初期の皇帝像、中世のイコニックな彫刻群、ルネサンス初期のドナテルロなどの彫刻とバロック期のベルニーニらの彫刻などを並べて比較すれば、各時代の価値観と世界観に明らかな色合いの差異を読み取ることができる。教科書に書かれている〇〇イズム、〇〇主義などの名称や特徴に関する知識だけでなく、学生たちには対象を見る眼を涵養してもらいたいのである。

更に、ルネサンス以降近代にいたる建築を理解する上では宗教思想だけでなく科学思想の理解も必要である。特に 17 世紀以降の建築と空間造形を理解する上では実証的考古学や天文学の発展、近代合理主義の成立や人間の能力に関するカント的転回、イギリス経験主義やフランス啓蒙思想、ニュートンの物理学における空間概念やラマルク、ダーウィンらの進化論など枚挙にいとまがないが、これらを科学革命と呼ぶとすれば、市民革命と産業革命を合わせた３つの革命が後の建築や都市造形の在り方に如何に作用したかを理解しておくことは、20 世紀の目まぐるしい社会変化、価値観の変化、科学技術の発展の中で繰り広げられた近代建築と造形芸術の造形理念と作品を理解する上で不可欠である。

現代という時代を正確に読み取ることは非常に難しいが、環境の世紀と呼ばれる時代を生きる学生には地球的規模の自然の運動と人間個人の倫理的行動の在り方が問われている。時代の只中に身を置くことの重要性と共に時代を俯瞰的に眺める視点をもって、学生一人一人が自身の問題意識と課題（テーマ）を発見してくれることを期待しつつ講義を行っている。